

第33回「ふるさと春日井学」研究フォーラム』

テーマ『「ふるさと春日井の魅力」ってなに？』

10月11日(日)市民活動支援センター(ささえ愛センター)において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『「ふるさと春日井の魅力」ってなに？』で開催しました。講演は、タレントで春日井市広報大使の宮本 忠博氏に『「ふるさと春日井の魅力」ってなに？』と題しユーモアを交えた軽妙なトークでわかりやすく解説していただきました。現在は“ローカルタレント”として中部圏で活躍されている宮本忠博氏(みやもっちゃんの愛称、1964年生まれ、51歳、巢山プロ所属)は春日井広報大使としても活躍されておられます。江南市出身で、小牧市味岡中卒、小牧工業高校を出て、中部工業大学(現中部大学)機械工学部卒。春日井市とはこの大学でつながると自己紹介されました。

報道記者も含めて、市民30名の参加がありました。



II. 春日井広報大使に

ラジオで商店街を回る番組に出た。CBCの「街角ステーション」という番組(2000.10-2003.3)で勝川商店街を歩き、写真のヤマグチの息子と意気投合して、後日カメラを買いに行った。勝川弘法に來ないかと誘われ、そこで少しずつブースを出していったら、いろんな人に声をかけられた。そんな時に「宮もっちゃん、司会すりゃあいいんじゃない」と、春日井まつりにでることになった。それを契機に「市政70周年で観光大使やってみない!」と声を掛けられ、めぐりめぐって「春日井広報大使」になった。広報大使になって、春日井が小野道風のまちだとわかった。花札には馴染んでいたのびびっくりした。「書のまち春日井」にちなんで、書ではなくて

「春日井カエルまつり」をやってみたいと言ったら、2年前の弘法市で第1回が実現できた。春日井のコンセプトは“書のまちのカエル”だ。道風は必ずそこにいないといけない。「カエル書きましょ」、とにかく筆を使ってやらないとダメだ。書のまちだからできるカエルまつりをと、自ら企画、プロデュース、出演し開催した。これが2011年からの春日井「蛙プロジェクト」だ。それが2年たって春日井広報大使の話がきた。中日新聞が記事にしたが、事後報告記事だった。私が何かをやってきたからこそ結果がついてきた。

III. 春日井大使をやってみてわかったこと

春日井広報大使はいろんなところで言えないことが多い。仕事がパタッと止まった時があった。「宮本忠博は“商品として”すでに出来ている」と言ってくれた人がいた。なら、ボクはウチ(内)を攻める。春日井市内で再出発したらいいんだと思った。『春日井のむかし話』を見て、最後に付いていた地図を見て回ってみた。内々神社に行った時に、視聴率がとれるのは、一に動物、二に赤ちゃんだと思っていたことから、「むかし話」がある場所にある小学校と組み合わせるといいと気づいた。校長に会って話してみると「えー、そうなんですか」と返ってきた。「小学校区、平成25年版」を見て、これまで16校を訪問した。最初に行ったのが内々神社だった。「こんな森の中だが、隣は岐阜県だ--へい!」。西尾小学校の校長に会ったら、校区にコンビニがないことがわかった。玉野小学校は英語教育のモデル校だとわかった。押沢台小学校と石尾台小学校は英語力が高いとわかった。3校を見て、文化の違いがわかった。こういうことが動いてわかった。動かないとわからないことだ。

「春日井見つけ隊」で、太清寺で家康の勝負服「勝川具足」の話聞いた。竹林が今も残っている。このことをフェイスブックに載せた。勝川小学校はこのエリアではなかった。山王小学校に行ってみた。「そこにしかない盛り上がり」はなかった。地元の人に提案してあげることが必要だと思った。「知らない人」にアプローチすることが必要だ。そこに可能性がある。

「書のまち春日井」について立強さんに聞いてみた。どこで書道用具を買うかと聞いたら名古屋の青柳堂だという。春日井では揃はないということだ。剣道の道具も同じで小牧で買うという。春日井で何かをやる人はいないのではないかと。高名な人が学術的に取り組むことも必要だが、違うアプローチでやらないといけない。稲沢の幼稚園で難しい漢字を教えている。「桔梗」の字が読める。何かとつかかりがあるといい。「道風くん」をとっかかりに「書道」を習い、いつか「達人」になる--など。「春日井カエルまつり」を通してわかったことだ。書のPRはカエルだと考えている。

IV. 「 L M S 」(Look Move Sound)で

春日井の魅力を売り込むには、「見るもの」「参加させるもの」「BGMのような音楽、ボイス」の3つが必要だ。おじさんが書道教室を開いていた。免許がいらないということが動いてみてわかった。ボクが求められてきたことは「コンパクトとインパクト」だ。ラーメン食べ歩きで11軒も回り、動いてわかったことは「苦しいときに何かが生まれる」という言葉。1軒1軒違う味の表現に「あいう

えお」で違いをつけた。「あ～」「いや」「うお～」「えらい」「お～」を頭につけることで気が楽になった。この「あいうえお」にリアクションをつける。

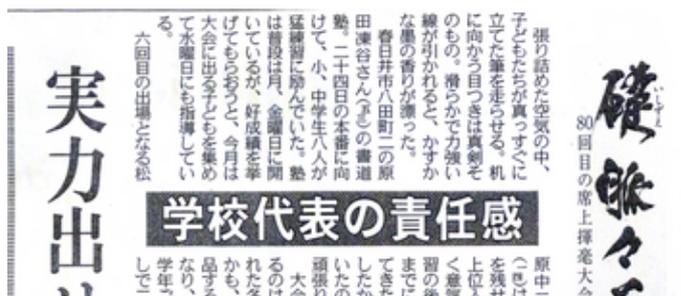
「切口をどうするか」だが、「誰に対して」「何を仕掛けるのか」だ。しかし、「続けることが必要」だ。書では、カエルだ。剣道では、春と秋の大会があることをご存知だろうか。高校生の大会だけでなく、現役女子大生の全国大会も行われている。これに地元の剣道場でやっている人が競い合う「剣道場まつり」を2月に立ち上げみてはどうか。Moveの部分で面白いものにする。これまでの人脈を活かし、興味をもってもらおうアプローチも、**柔らかい切口**で行ってほしい。

(記録：塚田忠雄)

OPINION

『ふるさと春日井「書の風景」』

—「書のまち春日井」「まちづくり」を考える—



中日新聞(平成27年10月24日)記事

「80周年記念作品展ポスター」

平成14年12月7日(日)第22回「ふるさと春日井学」研究フォーラムにおいて、テーマ『書のまち春日井の書写教育の展望と課題』で春日井市立小野小学校校長の宮田健一氏より講演していただきまし

た。

1936年(昭和11)より今日まで欠ける年なく続けられてきた「県下児童・生徒席上揮毫大会」の取り組みの報告は感動的なものでありました。「書のまち春日井」のが創られてきた歴史の一端を垣間見ることが出来ました。この地域の特色ある教育文化の伝統的事業であり、地域に深く根ざした、地域社会の誇りとして今日あることがよく理解できます。何と言っても、戦時下においては「若し当日空襲警報ありたる時は解除を待つて・・・」行われました。防空壕も完備し、避難、引率などの職員は必死の覚悟で開催されたと伝えられています。このエピソードは強烈なインパクトで今日の私たちに伝えてくれています。地域の人々、教職員、父兄の並々ならぬこの行事に対する熱い思いが伝わってくる感動的、歴史的な出来事であったことがよくわかります。

今日「まちづくり」は、その地域の文化、歴史、自然の特色や魅力を資産としてその活用の中ですめられることがセオリーであり、常識になってきています。この「県下児童・生徒席上揮毫大会」は、「書のまち春日井」に相応しい誇りであると共に、三蹟の一人小野道風を慕う地域の人々が大切にその歴史を継承し続けてきた「ふるさと意識」の象徴ではないかと思います。今日的に言い換えれば、これは立派な「教育文化遺産」の一つとして、広く市民と関係機関に働きかけ認識してもらふべきものではないかと感じています。(地方創生の一環として「COOL JAPAN」の候補として登録してもよいのでは・・・)

従来の「まちづくり」論は「経済効果・効率」を優先にして考えられてきました。しかし、それは経済(資本)の流れが行き詰まったり、破綻した途端に「まちづくり」も行き詰まります。高度経済成長期に国策として進められた都市開発型「まちづくり」の典型としてのニュータウン、行政主導型「まちづくり」としての、ふるさと創生事業(1988~89年)、「まちづくり三法」制定を中心とした各種補助金行政による商業政策、経済優先型「まちづくり」(まちおこし、村おこし)としての観光開発等々いずれも今日持続可能な成功事例は、それほど多いとは言えません。(具体事例は省略)従って、資本(お金)の価値を優先する発想ではなく、Heritage(遺産)の価値を見直してそれを社会共通のProperty(資産)とする発想がこれからの新しい「まちづくり」の発想であることに目を向けるべきだと思います。こうした理論は現在社会の共通認識となってきましたが、その理論をどのようにして実践して行くのが今日問われていると思います。各地域毎に、実践方法は異なります。成功事例を真似れば成果が上がるという性質のものではないところに「まちづくり」の困難さがあります。それは、地域毎に、歴史、文化、自然環境が異なり、地域の成り立ちもそれぞれ異なるからです。「ふるさと意識」というIncentive(誘因)がどの程度有るのか無いのかということがその地域の「まちづくり」の成否を決定的に左右してゆくものと思われま。地域の魅力や特色が認識されれば、愛着が生まれます。愛着があれば「護りたい」「継承して行きたい」いう意識が生まれます。地域の歴史や文化を保存し継承する活動に繋がって行きます。「ふるさと意識」を醸成する活動の意義がここに生まれます。従って「ふるさと意識」醸成の実践は、「まちづくり」の重要なFacilitate(促進する)な役割を担っているということが言えます。学校教育、生涯学習、各種地域活動の連携の中で個別の研究が体系的、系統的に「ふるさと意識」形成のための学習プログラムとして官・学・民間わず作られて行くことが現実的には望まれます。その意味で『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』をconceptとしてこれからの「まちづくり」の方向は、「ふるさと意識」を基礎とした価値創造型(Venture型)、或いは知識、知恵(Wisdom)を出して、組織、人(地域指導者)を積極的に活用しながら実践して行く地方分権型・地域協働型の「まちづくり」が到来したのではないかと考えます。

(文責:河地 清)

次回

「ふるさと春日井学」

研究フォーラム（案内）

第35回

日時：平成27年12月6日（日）13:30～15:30

テーマ：

『濃尾地震と落合池—歴史から防災を学ぶ—』

講演：近藤 雅英 氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム副会長）

場所：**市民活動支援センター・ささえ愛センター 2階第1
集会室**

フォーラム内容：前回の「春日井の地質」（長縄秀孝氏）は、この地域の防災を考える上で貴重な内容でした。落合池はこの地域最大の農業用水池でした。濃尾大地震の時どのような防災対策が・・・続きはFORUMで

（各回非会員の方のみ資料代500円徴収させていただきます。）

事務局：〒486-0825 春日井市中央通り2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索